

西のサワラ、東北の海に

西日本の高級魚・サワラの水揚げが東北の海で急増している。海水温の上昇が一因という。日本海ではこの100年で1・6度上がった。カタクチイワシが増え、ハリセンボンが定置網にかかるようになった。地球温暖化の影響が日本の漁場にも出ているのか。

(歌野清一郎、大久保泰)

サワラをめぐる国内の地図はここ10年で大きく塗り変わった。96年の漁獲量上位は①長崎②宮崎③沖縄で、主漁場は東シナ海だった。ところが、06年は①京都②長崎③福井と日本海勢が東シナ海勢を上回った。

暖かい海を好み、東シナ海や瀬戸内海、中国の黄海を産卵場とする西の海の代表格だったサワラ。社団法人・漁業情報サービスセンターの石

日出生理事は「98年を境に日本海の水温が高温化傾向に転じたことが日本海側のサワラの漁獲量増加と深く関係している」と話す。

為石理事らが85〜02年まで兵庫県北部の余部港沖の定置網にかかったサワラを調べたところ、98年以前はほとんど見られなかった。だが00年から冬でも網に入るようになった。

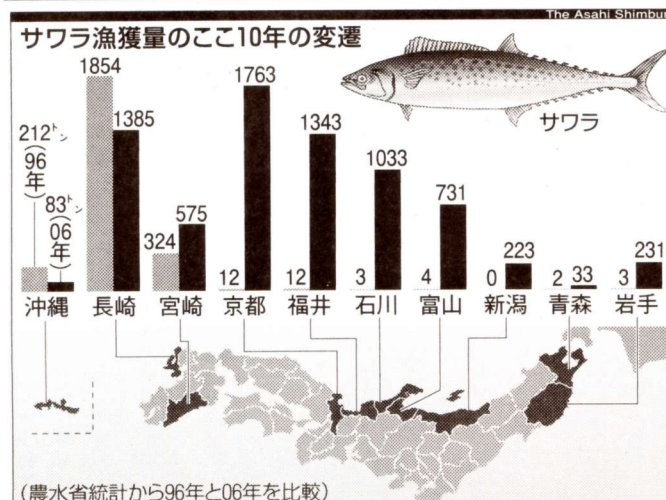
メモ

日本のサワラは東シナ海系と瀬戸内海系の二つの魚群があり、九州と瀬戸内海沿岸が漁場の中心だった。97、98年に東シナ海系と瀬戸内海系の漁獲量が相次いで最低水準に激

減したが、その後は回復傾向にある。06年の日本の漁獲高1万3600トに対し、韓国は3万4千ト(05年)、中国は38万ト(04年)。水産庁は、日中韓共同での資源管理が急務としている。

森、岩手、宮城など東北の太平洋側でも捕れるようになった。

気象庁の最新の分析で



もっとも知りたい!

温暖化、日本の漁場に異変

減して高級魚化した一方で、22度程度の暖かさを好むカタクチイワシは日本海での分布域を広げた。サワラはそのカタクチイワシがエサ。サワラの日本海進出は安定したエサの分布が一因ともいわれている。

フグの仲間のハリセンボンにも異変がある。昨冬から今春にかけて、島根県ではハリセンボンに

アの気温の上昇が、日本海の海面水温にも影響を与えているという。

温暖を好むハリセンボンが冬場、日本海へ流入すると、大半は冬を越せないといわれていた。だが、冬場に水温が下がらずにハリセンボンの生息域が徐々に北上し、定置網漁への影響を懸念する声も出始めている。

日本での生息は難しいとみられていた。ところが、最近では東京湾で毎年、生息が確認され、和歌山県の田辺湾や鹿児島市の錦江湾、愛媛県宇和島市沿岸などで徐々に生息域を広げているという。和歌山県で調査を続ける京大瀬戸臨海実験所の久保田信准教授は「繁殖は間違いない。暖かい和歌山の海水が温暖化の影響でより生息しやすい環境に変化しているのだろう」と分析する。



島根県沖で大量に定置網にかかったハリセンボン。2月、松江市美保関町で、関口聡撮影

太平洋側でも変化は起こりつつある。東南アジアからインド洋の熱帯域が原産のムール貝の一種のミドリイガイ。神奈川県藤沢市の新江ノ島水族館の学芸員の植田育男さんによると、80年代に東京湾と大阪湾で確認された二枚貝で、日本とアジアを行き来する船底に付着して運ばれたとみられ、冬場に水温が下がる

「気候変動に関する政府間パネル(IPCC)」の最新報告では、日本周辺などの北半球の中緯度の海水温は今世紀末には2度程度高くなると予測する。また、大気中の二酸化炭素濃度の上昇で海洋の酸性化が進むという。炭酸カルシウムの殻を持つ貝類やサンゴなどが溶けて死滅し、海の生態系を変える可能性がある。